

男女の一人称代名詞における 「本人の意識」と「社会的期待」との比較

金 秀容

1. はじめに

日本語の男女差がなくなっているという多数の報告の中で、依然として男女差が明確に現れている（一人称代名詞）に関して述べる。特に、本稿では、一人称代名詞の使用に関する〈本人の意識〉と〈社会的期待〉の面から探ってみることにする。

1.1 先行研究及び研究目的

まず、現代の一人称代名詞に関する先行研究を整理してみる。大きく以下のような三点にまとめてみた。

一番目は、現在の一人称代名詞の男女の使い分けに関する一般的な記述である。これには、金丸(1997:16)・金水(2003:135)などがあげられる。これらによると女性専用の一人称代名詞は「あたし」・「あたくし」・「あたい」であり、男性専用の一人称代名詞は「おれ」・「ぼく」・「おいら」・「わし」、「自分」である。さらに、男女共用としては「わたし」・「わたくし」を上げている。二番目は、一人称代名詞の使用に対する意識調査である。全てアンケート調査である。これには小林(1997a)・杉戸/尾崎(1997)・尾崎(1999)・尾崎(2001)・尾崎(2004)などがあげられる。このような意識調査においても女性には主に「わたし」と「あたし」が、男性には主に「ぼく」と「おれ」が見られ、顕著な性差が現れていると述べている。三番目は、実際の会話を資料とした談話分析である。これには小林(1997b)・桜井(2002)などがある。ここでも意識の研究と同様に性差が明確に現れていると報告されている。

以上、一人称代名詞の先行研究に関して三つに分けて述べてみた。これらの調査結果から、意識の次元においても実際の使用の次元においても一人称

代名詞の性差は明確に存在することが認められる。しかし、性差があるとしても異なる次元同士を比較する場合は〈ずれ〉が生じるのではないかと考えられる。中村(1996, 2001:202, 2005)は、女ことばは女性が実際に使っている言葉づかいではなく、抽象的な規範だと述べているが、ここからも異なる次元同士の〈ずれ〉が十分に予測できる。

そこで、本研究では一人称代名詞に関して、言語使用者である〈本人たちの意識〉と〈社会的期待〉をとりあげ、それらが性差を中心にどこがどうずれていてどこがどう一致しているのかを調べ、一人称代名詞の現状をより詳細に記述していく。

1.2 調査方法及び資料処理

2003年6月～7月にかけて、20代男女(東京都立大学生 女性:142名 男性:147名)と50代男女(その親 女性:85名 男性:63名)、合計437名を対象にアンケート調査を行った。アンケートの調査項目は、〈自分の言語使用〉という欄と〈他人の言語使用〉という欄の二つに大きく分けている。基本的に質問の内容は同じであるが聞き方は少し異なる。自分の言語使用の欄では、話し相手の性に分けて「(誰誰)に対してあなたは自分のことをどういいますか」と質問し、他人の言語使用の欄では話し相手の性とは関係なく、20代男女・50代男女それぞれを対象として取り上げ「(その対象)なら、どんな言い方がふさわしいですか」と質問した。なお、質問形式は選択肢式であり、回答は「わたし」、「わたくし」、「あたし」、「自分」、「わし」、「ぼく」、「おれ」、「うち」から一つを選択するようにした。このようにして、自分の言語使用の欄から得られた回答は〈本人の意識〉と扱い、他人の言語使用の欄から得られた回答は〈社会的期待〉と扱って分析を行うことにする。さらに、発話場面設定として〈親しい友達に話す場合〉と〈初対面の人に話す場合〉の二つの場面を設定したが、ここでは〈親しい友達に話す場合〉をとりあげて記述する。ただし、〈初対面の人に話す場合〉も一人称代名詞の丁寧度の確認のため、結果の一部を参考にした。一方、集めたデータは最終的にはグラフ化して示した。グラフそれぞれにカイ二乗検定(独立性の検定)の結果を示し、

有意確率5%で解釈している。

2. 調査の結果

分析に入る前に、分析においての三つの観点を先に提示しておきたい。

i) 本人の意識

ここでは、自分の言語使用についての回答を回答者の本人の意識とみなして分析を行う。自分の言語使用においては話し相手の性に分けて質問をしたが、話し相手が女性の場合でも男性の場合でも同様な結果であったので、本稿では話し相手が女性の場合の結果を提示することにする。

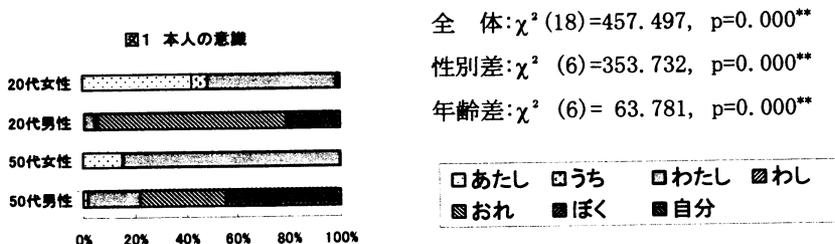
ii) 本人の意識と社会的期待との比較

自分の言語使用に関する回答と他人の言語使用に関する回答を比較する。例えば、20代女性の場合なら、20代女性の自分の言語使用に関する回答(本人の意識)と、20代女性の言語使用に対する四つのグループの回答(社会的期待)を比較することになる。〈社会的期待〉と名づけたのは、一つの対象に対する複数の回答であることと、アンケートの質問文(どんな一人称代名詞がふさわしいか)からである。グラフでいうと、特定のグループの一人称代名詞使用に関して、その本人の意識①と各グループの期待②・③・④・⑤との比較である。

iii) 社会的期待の傾向

ここでは、他人の言語使用に対する四つのグループの回答の全体的傾向を把握したうえで、各グループの社会的期待の間にはどのような差が現れているのかをみる。グラフにおける②・③・④・⑤を比較する。

2.1 四つのグループの本人の意識の比較(図1)



結果には明確な性差が現れており、同時に年代差も目立つ。性差においては、女性には「わたし」と「わたし」が主に現れているが、男性には「おれ」と「ぼく」が主に見られ、従来女性形・男性形とされてきた一人称代名詞の使用傾向が確認される。また、男女それぞれの年代差をみると、女性の場合、50代女性は中立的な一人称代名詞の「わたし」を主に選んでいるが、20代女性には女性形の「わたし」が4割近く現れている。男性の場合、20代男性は主に「おれ」を選んでいるが、50代男性は「おれ」よりも「ぼく」や「わたし」を選んだ人の方が多い。

こうした年代差は、「わたし」や「ぼく」の丁寧度に関する認識が20代と50代では異なるためだと考えられる。20代は50代よりも「わたし」や「ぼく」を丁寧な形式ととらえているのである。このことは、くだけた言葉遣いが予想される親しい友達と話す場合と、丁寧な言葉遣いが予想される初対面の人と話す場合との比較からも確かめられる。表1は、二つの場合について、「わたし」・「ぼく」・「わたくし」に対する四つのグループの本人の使用意識をまとめたものである。グループごとに、選ばれた一人称代名詞と発話場面との関連性を見るためカイ二乗検定を行った結果、四つのグループともに有意差が現れた⁽¹⁾。()の中は百分率を示す。

〈表1〉発話場面による「わたし」「ぼく」「わたくし」に対する本人の使用意識

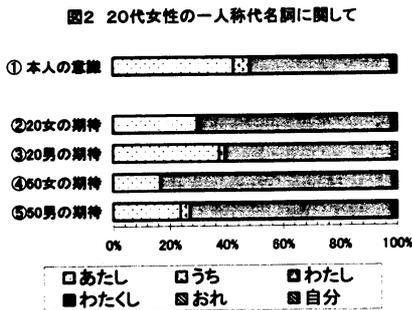
	話し相手が親しい友達の場合				話し相手が初対面の人の場合			
	わたし	わたくし	ぼく	その他	わたし	わたくし	ぼく	その他
20女	71(50.4)	0(0.0)	0(0.0)	70(49.6)	124(87.3)	4(2.8)	0(0.0)	14(9.9)
20男	6(4.1)	0(0.0)	28(19.0)	113(76.9)	27(18.4)	2(1.4)	63(42.9)	55(37.4)
50女	72(84.7)	0(0.0)	0(0.0)	13(15.3)	51(60.7)	33(39.3)	0(0.0)	0(0.0)
50男	13(20.6)	0(0.0)	21(33.3)	29(46.0)	42(66.7)	13(20.6)	5(7.9)	3(4.8)

表1を見ると、女性においては、相手が初対面の場面になると、20代女性は「わたし」の使用者が増えるが、50代女性はその割合が減り、代わりに「わたくし」の使用者が4割ほどになる。ここから、20代女性の方が50

代女性よりも「わたし」の丁寧度を高くとらえている傾向があることが分かる。一方、男性においては、話し相手が初対面の場合になると、明らかに「わたし」を使用する人の割合が増えているので、男性は「わたし」を丁寧な場面で使用する一人称代名詞として認識しているといえる。しかし、ここでも年代差が見られる。相手が初対面の場面になると、「ぼく」の使用者が20代男性では大幅に増える。50代男性では逆に「ぼく」は減り、代わりに「わたし」が大幅に増えて、「わたくし」の使用者も2割程度になる。すなわち、「ぼく」は、20代男性には丁寧な場面で使用できる一人称代名詞として認識されているのに対して、50代男性にはあまり丁寧な一人称代名詞としては認識されていないということになる。そして、多くの20代男性にとっての「わたし」は丁寧度の非常に高い改まった形式なのだといえる。

2.2 グループ別の考察

2.2.1 20代女性の一人称代名詞の使用に関して(図2)



〈本人の意識と社会的期待の比較〉

①と②: $\chi^2(5)=16.363$, $p=0.006^{**}$

①と③: $\chi^2(4)=5.321$, $p=0.256$

①と④: $\chi^2(5)=26.910$, $p=0.000^{**}$

①と⑤: $\chi^2(5)=11.549$, $p=0.047^*$

〈社会的期待の傾向〉

②・③・④・⑤の比較

全体: $\chi^2(12)=22.439$, $p=0.033^*$

性別差: $\chi^2(4)=10.384$, $p=0.034^*$

年齢差: $\chi^2(4)=10.830$, $p=0.029^*$

1) 本人の意識と社会的期待の〈ずれ〉

20代女性が使用するとして選んだ一人称代名詞(①)と、20代女性に対して20代女性(②)・50代女性(④)・50代男性(⑤)それぞれが期待する一人称代名詞との間に〈ずれ〉が現れている。三つのグループともに、20代女性に対して、20代女性本人の意識よりも「わたし」を多く期待している。

2) 社会的期待の傾向

全体的に、選ばれている主要な形式は「わたし」と「あたし」であるが、どのグループも過半数が「わたし」の使用を期待している。ただし、後述の2.2.3(図4)に見られる50代女性に対する期待と比べると、「あたし」への期待は多い。また、年代差が目立ち、50代が20代より「わたし」を多く選んでいる。特に50代女性がそうである。一方、20代男性には女性形一人称代名詞「あたし」への期待が他のグループより多く現れている。

3) 分析と考察

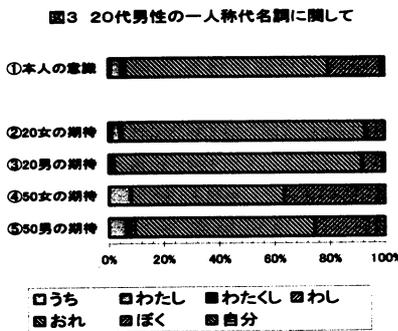
以上をまとめると、従来の女性形一人称代名詞「あたし」を使用するという本人の意識と、それよりは中立的な一人称代名詞「わたし」を求める社会的期待との間に〈ずれ〉が生じていることになる。ここから、社会は20代女性に現状以上に丁寧な言葉遣いを期待していることが分かる。ただし、20代男性の期待は、20代女性の本人の意識との〈ずれ〉が生じておらず、四つのグループの中で「あたし」への期待が一番多いグループであった。これは、20代男性は20代女性の言語使用に対して他のグループより vrouelike 言葉遣いを期待しているとも解釈できる。

しかし、「わたし」の認識においては、先に見た図1と表1から年代差が確認できた。「わたし」の丁寧度に関して、50代女性より20代女性のほうがより高く認識していたのである。また、20代女性の使用する「わたし」の丁寧度に関する男性の評価においても、50代男性より20代男性のほうが丁寧度をより高く認識していることが確認できる⁽²⁾。つまり、20代女性に「わたし」を期待する際、50代より20代のほうがその丁寧度をより高く認識しているということである。ここから〈ずれ〉を再び解釈すると、まず、50代が20代女性に「わたし」を多く期待したのは、「わたし」の使用に対する強い当為性からであり、このような認識は50代が社会の大人として常識とされる丁寧な言葉遣いを身につけている結果、現れたものと思われる。また、このような傾向は、特に50代女性のほうに強く現れている。一方、20代女性が同性同年代の20代女性に、丁寧度の高い一人称代名詞と認識している「わたし」を多く期待したことは、社会が大人の女性に求める言葉

遣い、つまり、丁寧に話すことを強く意識した結果ではないかと思う。本調査において、回答者の20代女性グループは全て大学生である。学生という身分から考えると、自分たちを社会人よりは学生として強く認識していたと思われる。しかし、他人の20代女性に対する回答になると、学生よりは社会人の若い女性としての認識が強くなり、自分より丁寧な言葉遣いを期待したのではないかと推測される。これはまた、女性の言葉遣いに対する固定観念が強く働いたともいえる。

なお、20代女性の言語使用に対する50代女性の期待は図1に現れている50代女性本人の意識と似ている。ここから、50代女性は自分と同様な言葉遣いを20代女性にも期待していると見られる。

2.2.2 20代男性の一人称代名詞の使用に関して(図3)



〈本人の意識と社会的期待の比較〉

①と②: $\chi^2(6)=14.602, p=0.024^*$

①と③: $\chi^2(5)=13.954, p=0.016^*$

①と④: $\chi^2(5)=11.342, p=0.045^*$

①と⑤: $\chi^2(6)=4.676, p=0.586$

〈社会的期待の傾向〉

②・③・④・⑤の比較

全体: $\chi^2(18)=68.176, p=0.000^{**}$

性別差: $\chi^2(6)=5.610, p=0.468$

年齢差: $\chi^2(6)=55.847, p=0.000^{**}$

1) 本人の意識と社会的期待の〈ずれ〉

20代男性が使用するとして選んだ一人称代名詞(①)と、20代男性に対して20代女性(②)・20代男性(③)・50代女性(④)それぞれが期待する一人称代名詞の間に〈ずれ〉が現れている。20代男性に対して、20代男性本人の意識よりも、20代は「おれ」を多く期待し、50代女性は「ぼく」を多く期待している。

2) 社会的期待の傾向

他の形式より「おれ」を期待する人が多い。また、どのグループも後述の2.2.4(図5)に見られる50代男性に対する社会的期待より「おれ」を多く期待している。しかし、年代差が目立つ。四つのグループの中で、20代は50代より「おれ」を多く期待し、50代は20代より「ぼく」を多く期待している。

3) 分析と考察

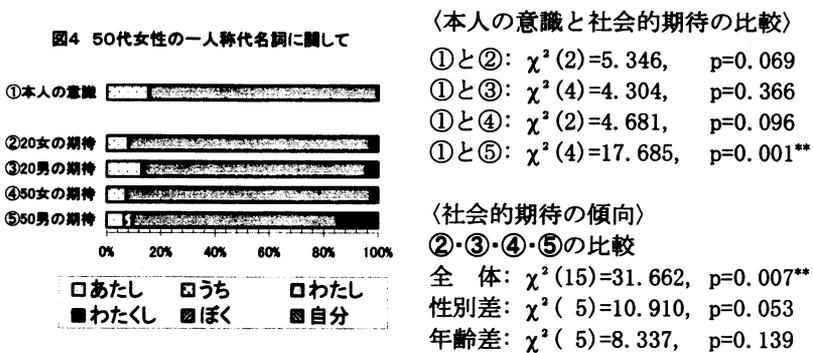
まず、本人の意識においても社会的期待においても男性形の「おれ」と「ぼく」が主になることには変わりがない。両者の〈ずれ〉について述べると、20代男性本人の意識より、20代は「おれ」を、50代女性は「ぼく」をより多く求めており、社会的期待において年代差が現れている。

「おれ」は一般に親しい友人同士のざっくばらんな一人称代名詞として知られている(三輪 2005:52)。しかし、20代の「ぼく」に関する認識を調べると、20代は「ぼく」を丁寧な場面で使用する一人称代名詞として認識していることが分かった⁽³⁾。ここから、20代のほぼ8割が20代男性の「おれ」の使用を期待しているということは、「ぼく」より「おれ」のほうが友達との会話において、親しみを表すという意識を持っているからであると見られる。さらに、金水(2003:128)では、男子の「おれ」の使用に関して、女子大学生らに聞いた結果、男らしい印象を持つという回答が得られたと述べている。したがって、20代女性の「おれ」の使用に対する期待では、男らしい言葉遣いへの期待も含まれているといえる。

一方、50代の「ぼく」に関する認識をみると、まず、50代男性の場合は図1と表1で確認されたように、「ぼく」を丁寧さを現す形式としては認識していない。また、50代女性にも同様な傾向が見られた⁽⁴⁾。つまり、50代は、くだけた場面において20代男性の使用する一人称代名詞として、「おれ」とともに「ぼく」を期待しているということである。ここで、20代男性の本人の意識と〈ずれ〉が現れた50代女性の期待について述べると、50代女性が20代男性本人の意識よりも「ぼく」を多く期待したことは、金水(2003:127)で述べられているような「おれ」の使用による荒い言葉遣いを避けてほしかったからだと思われる。

なお、20代男性の言語使用に対する50代男性の期待は、図1に現れている50代男性の本人の意識と異なる傾向を見せており⁽⁵⁾、さらに、20代男性本人の意識との間に〈ずれ〉も生じていない。これは、20代男性の言語使用に対して自分たちとは異なる言語使用をすることを容認しているものと解釈でき、50代女性の20代女性に対する態度とは対照的である。

2.2.3 50代女性の一人称代名詞の使用に関して(図4)



1) 本人の意識と社会的期待の〈ずれ〉

50代女性が使う一人称代名詞(①)と、50代男性が50代女性に期待する一人称代名詞(⑤)との間に〈ずれ〉が現れている。50代女性に対して50代男性は「わたくし」を50代女性本人の意識より多く期待している。

2) 社会的期待の傾向

どのグループでも「わたし」を期待する人が大半を占める。性差や年代差は現れず、中では50代男性の「わたくし」への期待が目立つ。

3) 分析と考察

全体的に、50代女性の本人の意識においても社会的期待においても、「あたし」はあまり現れず、「わたし」が多い。50代女性の使用する「わたし」の丁寧度に対する意識においては、四つのグループともにくだけた場面において